

土方異舞踏論

—消える構造・その1〈自己放棄〉—

三上賀代

はじめに

今日、世界に高く評価されている〈舞踏〉は、〈暗黒舞踏〉として、土方異によって創始された。その特徴は、一般的に①“がに股”といった日本人の体の特性や、風土性を生かしたものであるとされている。1959年発表『禁色』が〈舞踏〉の始まりである。以後、土方は、独自の表現形式による作品群を発表し、1986年57歳で死去した。

〈舞踏〉は、土方によって創り上げられた技法によって、世界の舞踊に新たな地平を拓いたと考えられる。

土方の技法とは、②「命がかたちに追いつがる」という言葉に象徴されるように、③「必然性の現出」として、存在そのものをフォルムに託し、彼の舞踏観、世界観を反映したものである。

さらに④「生活と切断された舞踊は創り物にすぎない。だから、絶えず危機感を培養する側に廻るのだ」と語る土方の日常生活は、彼の思想を実践するものと考えられる。

本研究は、筆者が土方に師事した1978年から1981年の4年間の⑤“稽古ノート”を資料とし、加えて、同期間の土方の生活事例を考察の対象としてここから土方舞踏の基本概念を明らかにすることによって、土方舞踏の技法を探るものである。

●土方舞踏史における“稽古ノート”の位置

1973年以降、舞台に立つことのなかった土方は、1974年から1976年、芦川羊子の白桃房連続公演を演出、振付。ここにおいて〈暗黒舞踏〉の技術的体系を完成したと言われている。

以後、1983年芦川の公演の構成、演出によって活動を再開するまで、表だった活動も少なく、沈黙の時期とも呼べるものであった。しかし、この時期、土方は弟子たちの稽古と、共同生活とも言い得る生活において、新たな踊りの構想を練る時を過ごしたと考えられる。

このことから、考察の対象となる“稽古ノート”が、完成された舞踏技術を基に、土方の新たな舞踏の展開を含むものであることが理解される。

●土方舞踏の〈型〉と〈型の成立条件〉

⑥「私の方法は徹底的な写実主義の手法をとっています」という土方は、動物、植物、人間、現象等の様々な動きを丹念に採集し、〈型〉として細かく振り付けている。その振りには⑦「イメージと物理的

な条件を兼ねそなえ」た言語によって、1つ1つの〈型〉に、〈型の成立条件〉が具体的に示されている。

しかし、〈型の成立条件〉によって、〈型〉を踊るためには、土方舞踏における基本概念としての〈自己放棄〉を理解することが重要になる。

●基本概念としての〈自己放棄〉

衣食住に見られる土方と弟子たちの生活は、超日常的であり、また、生活及び稽古において、土方のイメージ喚起力の強い豊富な語彙は、常に弟子たちを刺激し続けた。

⑧「さらわれて、死なされて、再生して、風や草と話せる踊り手」になるとは、⑨「墮落して」⑩「禁治産者になる」ことによって確得される⑪「舞踏の戸籍簿」に登録されることから始まった。つまり、土方の言う⑫「置かれてあるところから始まる」踊りとは、舞踏の時空間としての日常から、既に始まっていたのである。

また、⑬「犬猫にも劣るもの」として生きるとは、『土方異燐燐大踏鑑』に象徴されるように、踊りの手本は犠牲体にある、ということ、言い換えれば、⑭「人間の条件などというものを、まず捨てることを意味している。

そのために、方法としての⑮「問答無用」の錯乱の日常が捏造された。そこにおいて、自己への確執を消すこと、すなわち“自分を消す”ことによってこそ、新しく舞踏家として生まれ直すことができるのである。

⑯「一気呵成に踊りという危険な場所に降り立つ」には、⑰「〈自己放棄〉による、ある種の解放」を知った肉体の、そこに至るまでの、分裂と錯乱を生きよ、という土方の意志を、弟子たちは生活の中から教えられたと考えられる。

おわりに

土方暗黒舞踏が、土方の思想と、⑱「メカニックに肉薄」すべき技術によって、究極においては、非常に自由な世界を創り上げている、ということを明らかにしていくため、今後—消える構造—として研究を続けたい。

注)

①筆者は土方から“がに股”という“かたち”を教えられたことはない。これに関しては後日発表予定。②③⑦～⑩は、筆者の“稽古ノート”より土方の言葉をそのまま使用。

④元藤燐燐「土方異とともに6」『アスベスト館通信6』P58、アスベスト館 1988

⑤土方による舞踏の訓練と講義を記録したもの

⑥「極端な豪奢、土方異リーディング」『W-Notation No.2』P16、ユー・ピー・ユー 1985